三題噺『・手紙　・世界の果て　・殴る』

夕日が、広い海を橙色に染めながら沈んでいく。
波が砂浜に打ち寄せる音が全身に響くのを感じながら、手の中にある瓶を力強く握りしめた。
震える目元を誤魔化すかのように、潮の香りを混ぜた風が撫でてくれる。
落ち着くようにゆっくり息を吐き、握りしめた瓶を夕日に翳す。
瓶の中に丸めて入れられた１通の手紙は、夕日の光を淡く透かしていた。
届くかもわからない。届けたい場所もわからない。届けたい人が、未だこの世に存在しているかさえもわからない手紙。
それでも、書かずにはいられなかった。この胸に溜まった鬱憤を、とにかく吐き出さなければ気が済まなかった。
呆れたように笑い、思いっきり息を吸い込んで、真っ直ぐ海を見る。

世界の果てを見てくると言っていなくなったあなたへ。
約束の日になっても帰ってこなかったあなたへ。
次に会った時には、一発殴らせてもらいますからね。

頬が濡れた感覚には気づかないフリをして、私は海に向かって瓶を投げた。